

降誕節第 8 主日礼拝説教要旨(2月15日)

『闇と光』 早川 真牧師

ルカによる福音書 18 章 31～43 節

私たちの信仰生活において、神の憐れみが全く見えないような闇の時を経て、再び光が差し込み、神の御心が分かる時があります。ある時には人間関係に和解を、ある時には病に癒しを、ある時には犯してしまった罪に赦しを…それらの全ての闇に神は光を差し込ませることがおできになります。この目の見えない人の信仰、それは闇の中にあっても光であるイエス・キリストに向かって叫び求める信仰でした。

私たちが闇の中で神を叫び求め、神の救いの光を得ることは、私たちだけではなく、信仰のない人々にまで神への賛美を引き起こすこととなります。そしてその時、見えなかったものが見えるようになります。それこそがこの世にあって闇の存在する理由であると言えます。闇がなければ光をはっきりと見ることはできません。

今朝の個所の前半のイエスが弟子たちに受難の予告をされる場面で、弟子たちはそのことを悟らなかったとあります。弟子たちには隠されていたとあります。弟子たちはイエスが天に昇られた後、聖霊が降って初めてこのことが分かりました。霊の目が開かれ、イエスの十字架と復活こそ全ての人にとっての救いであるということが見えるようになりました。

私たちが聖霊によって霊の目を開かれる時も同じことが起こります。そしてその時、「何をしてほしいのか」というイエスの問いに答えることが出来るようになります。再び、あなたの光を見ることが出来るようになりたいのです、と。地上には偽りの光が、偽りの希望が溢れています。私たちは、地上における闇と光のそのただ中で、どのような闇にも本当の光をもたらすことのできるお方、イエス・キリストを共に証ししてまいりたいと思います。